日本歯科医史学会々誌・第1巻第1号（第1号～
第5号まで歯学史研究）通巻6号・昭和48年8月

口腔領域における民間療法*

1. 民　間　薬

黒　須　一　夫*　櫻　井　達　也**

まえがき

古来，民間においては，口腔疾患，ことに歯痛は耐えがたきものであったのか，これを除去するため，種々の民間療法が行なわれてきた．民間療法とは，未開時代から民間において，言い伝えにより，種々の病気に用いた医療行為の集積であるといえる．疾患が病原菌によって，引き起こされることを知らなかった過去の時代には，古人は病気を諸々の精霊の働きによると考え，これに対処する方法が考案された．歯痛を中心とした口腔疾患も俗信と極めて密接な関係があり，呪術的なもの，宗教的な療法も少なくない．

この民間療法を分けてみると，

1．まじない的なもの

2．神仏の祈願によるもの

3．生薬によるもの

などである．

生薬によるものには，未開時代から民間において繰り返し行なわれてきた医療行為の集積であって，種々の植物あるいは，動物，鉱物による薬物療法である．すなわち，材料として薬用に供する目的で，植物，動物，鉱物などの自然物の生体または，一部を乾燥したり，簡単な加工を施して用いられてきた．この民間療法には，漢方医学が民間に沈下したものもあり，薬物学的にみて，効果が認められているものも多い．そこで，著者らは，歯痛を中心とした口腔疾患に用いられている民間薬372種を集め，一般的な口腔疾患名別に生薬名，製造法（黒焼，青汁，煎汁，粉末，その他）ならびに有効部位，用法成分などについて調査分類を行なったので報告する．

調査方法

従来の民間薬が歯科において，どのように利用されていたかを知るため，今日までに出版されている本草書，民間薬書，和漢薬書，生薬学書などの著書計31冊から調べだして，民間薬372種について以下の分類を行なった．

I. 口腔疾患名

民間薬を口腔疾患の治療に用いられている一般的なものをあげると：歯痛，虫歯，舌炎，口内炎，口内腫痛，歯槽膿漏，口臭，唇諸病，歯肉炎などであり，分類にはこれらの病名を用いた．

II. 製　造　法

製造法としては，黒焼，青汁，煎汁，粉末，その他に分けた．その一般的な製造法を簡単に述べると

1．黒焼：動植物を土器の容器などに入れて黒焼にすることで，普通は蓋のある素焼の壺を用いて，生薬を入れて，蓋と壺との間を粘土で練り固めて密封する．これをモミガラ，またはオガクズの中に埋めて点火し，黒焼をつくる．

2．青汁：生薬のしぼり汁のことで，すり鉢と布目の荒い絞り用の布を用いる．生薬をすり鉢に入れ，充分にすりつぶし，絞り布に入れ，手できつく絞り出したのを用いる．

3．煎汁：生薬を煎じて使用することで，生薬を細く刻み，また砕いて布袋に入れて煎じる．あるいは，そのまま煎じてカスを布でこすこともあり，煎じる容器は，土瓶や土鍋を用い．火力はなるべく弱い火で時間をかけて，煎ずるのがよいとされている．

---

* Folk remedies of Oral Diseaees, 1. Popular drugs

** Kazuo KUROSU　愛知学院大学歯学部助教授
*** Tatsuya SAKURAI　愛知学院大学歯学部付属病院薬局

表 1　生薬名による分類

生薬名	歯痛	虫歯	口内炎	口内腫痛	舌炎	歯槽膿漏	脣諸病	歯肉炎	口臭
植　物	54	38	36	18	8	9	7	9	10
動　物	8	12	2	3	3	4	6		
鉱　物	1	5			1		2	1	
併　用	44	24	14	12	19	13	3	4	2

表 2　製造法による分類

製造法	歯痛	虫歯	口内炎	口内腫痛	舌炎	歯槽膿漏	脣諸病	歯肉炎	口臭
黒　焼	21	12	16	12	9	10	5	4	3
煎　汁	30	12	14	4	1	4		7	2
青　汁	28	15	10	7		2	1	2	4
粉　末	17	11	9	7	7	9	3	1	1
その他	11	29	3	3	14	1	9		2

4．粉末：生薬を乾燥し，打ち砕いて粉末として用いる．

5．その他：丸薬，舐り薬，酒浸の方法もある．

III. 生薬分類

1．生薬名：生薬は，植物，動物（魚類も含む），鉱物，併用物（二種類以上の生薬を含む）に分けた．

さらに，これらを別名，門名，所属科名についても調べた．

IV. 有効部位

V. 成　分

VI. 用　法

各生薬を口腔疾患名別に以上の分類にもとづいて調査した．

成績ならびに総括

民間薬に使用されている生薬は，総数372種で，植物が主に口腔領域の民間薬として用いられていた．植物の中で，主な名称をあげると，アイ，アカザ，アンズ，ウメ，オウレン，カンゾウ，コンブ，サンショウ，ダイコン，ナス，ナンテン，ヌルデ，それにハスなどであり，動物では，ハチ，鉱物では，塩と石灰，その他のものでは，酒とか酢などが多く使われていた．

疾患名別では，歯痛107種，虫歯79種，口内炎52種，以下口内腫痛，舌炎，歯槽膿漏，脣諸病，歯肉炎そして口臭の順に生薬が用いられていた．また，歯痛と虫歯に対する使用頻度が多く，半数を占めている（表1）．

表 3　有効部位による分類

有効部位	歯痛	虫歯	口内炎	口内腫痛	舌炎	歯槽膿漏	脣諸病	歯肉炎	口臭
葉　類	12	10	10	3	4	1	4	4	2
果実類	13	9	5	4	2	1	2	2	1
根茎類	9	7	8	5	3	1		3	1
根　類	9	3	7	4					1
皮　類	4	4	7	3		1			
草卉類	5		2		1	4		1	3
木　類	6	5	1	1					
花　類		2	3	1		1		1	
種　類	4		1	1				1	1
その他	4		1	4	1		1	1	1

製造法による分類は，黒焼72種，煎汁74種，青汁69種，粉末65種，その他72種であり，黒焼が多く，他は大差がなかった．疾患名別からみると，歯痛，虫歯は，煎汁と青汁，黒焼が主に用いられている．口内炎は，黒焼と煎汁，口内腫痛，舌炎そして歯槽膿漏などでは，黒焼が主に使用されていた．なお，黒焼には，コンブ，ウメ，煎汁には，カンゾウ，青汁にはダイコン，アカザ，粉末には，オウレンをあげることができる（表2）．

生薬中，植物による有効部位では，葉類50種，果実類39種，根茎類37種であり，他は表3のようである．歯痛，虫歯は，果実類と葉類が多く，口内炎は葉類と根茎類，口内腫痛は，根茎類，舌炎は，葉類，歯槽膿漏は，草卉類，脣諸病と歯肉炎は，葉類が主に使用されていた．総体的に葉類，果実類そして根茎類が，広く使用されていたといえる（表3）．

用法をみると，口腔領域における民間薬は，もっぱら外用法が用いられており，その用法は，塗布，含む，含嗽，噛む，穴につめるそして貼るなどであり，興味ある用法としては，穴につめると足に貼るというものがある．疾患名別からの用法をみると，歯痛は，塗布，含むそれに噛む，虫歯は穴につめると塗布，口内炎は，塗布と含嗽，口内腫痛，舌炎，歯槽膿漏，歯肉炎は，塗布が主として用いられていた（表4）．

表 4　用法による分類

用　法	歯痛	虫歯	口内炎	口内腫痛	舌炎	歯槽膿漏	唇諸病	歯肉炎	口臭
塗　布	38	16	23	19	22	16	14	6	
含　む	26	13	7	10	3	2		2	5
含　嗽	7	4	12			1	2	1	4
噛　む	16	10	1			1			
穴につめる	3	21							
貼　る	8	2	1						
耳に入れる	3	6							
足に貼る			2	2					
そ の 他	6	9	6	3	6	6	2	5	

主な成分による分類は，精油57種，配糖体28種，アルカロイド25種，含窒素化合物17種，脂肪油15種，タンニン13種，脂肪族化合物11種などであった．精油をさらに詳細にみると，α, β, -Pinen, Camphene が多く，配糖体は，Indican，アルカロイドは，Berberin などが多かった（表5）．

考　察

以上，民間薬の特徴をみると，種々雑多の生薬が用いられていた．その系統的分類は，非常に困難で，限られた地域社会では用いられた民間薬の種類が異なり，種々な生薬が用いられていた．植物を中心に，動物，鉱物を用い，その材料となるものは，身辺にあるもので，素人でもわかりやすく，入手しやすい，生薬の1，2種類を求めて用いたり，飲食物の形で使われていた．その薬理作用は，上述の成分によれば，烈しいものはなく，毒性作用や副作用も少ない．効果につていは，効くものもあるが，明確でないものも少なくない．まじないとしか，考えられないようなものもある．それは，言い伝えにより拡がり，あるいは，ためしたら効果があるかもしれないという使用態度で，効果の判定は，主観的なものも多い．

口腔疾患のうちでは，歯痛疾患には植物が，他の口腔疾患に比較して，多く使用されていた．これは，歯痛が，多くの人々にとって耐えがたきものであり，この苦痛除去の願いから各人各様に取り去ろうとして，多数の民間薬が，生みだされたと考えられる．虫歯は，穴の中に薬物を入れ，殺菌消毒の効果を得るために，含有成分は，精油が多かった．また，塗布薬も使用されていた．口内

表 5　成分による分類

成　分	歯痛	虫歯	口内炎	口内痛病	舌炎	歯槽膿漏	唇諸病	歯肉炎	口臭
精　油	17	16	7	6		3		4	4
配糖体	6	9	5	2	1		3	1	1
アルカロイド	8	4	7	1	1	2	1	1	
含窒素化合物	5	2	2	2	2	1	1	1	1
脂肪油	3	5	3	1	1			1	1
タンニン	2	3	5	1			2		
脂肪族化合物	5		3	1		1	1		
そ の 他	19	6	23	4	4	4	2	2	1

腫痛は，薬物混合処方が多く，例えばアカザ，ハス，ワラビ，コブ，ウメ，ヤキドウスの6種類の植物を黒焼にして，塗布するという複雑な処方があった．舌炎疾患は，併用の中で，酢を用いて治療する方法がとられていた．これは酢が収斂作用，細菌に対する静菌作用をもっているという点で，使用されていたのであろう．歯槽膿漏は，アカザ，ハス，チサ，ユズそれにアンズなどの植物を用い，その含有成分は，ビタミンA，B，Cを含み，止血作用を呈する．これは，治療の目的からもよいと思われる．唇諸病および歯肉炎は，塗布として用いられたのが多かった．しかし，口臭疾患は，民間薬に使われる生薬の数が少なく，クロロフィリン含有成分の植物も少ないのは，意外であった．

民間療法は，医療の機会に恵れ，医学知識が進み，現代医学の普及につれて，次第に減りつつある．しかし，これらの口腔領域の民間薬の中から優れた歯科薬剤が，検索できる可能性もあると思われる．

ま と め

1．口腔疾患には，種々の生薬が使われていた．その生薬は，植物を中心に，動物，鉱物があり，歯痛，虫歯そして口内炎疾患などに，多数用いられていた．

2．生薬の使用に際しての製造法は有効に抽出するために，黒焼，青汁，煎汁，粉末，その他の方法であった．

3．植物の有効部位は，葉類，果実類そして根

茎類を主に用いていた.

4．生薬の用法は，もっぱら外用法が取り入れられ，塗布，含む，含嗽．嚙むなどが一般に行なわれていた.

5．口腔疾患の薬物の成分となるものは，精油，配糖体，アルカロイドそして含窒素化合物系を含むものが多く，精油には，α, β, -Pinen, Camphene などを含み，配糖体は Indican, アルカロドは Berberin などが多かった.

文　献

1) 多紀安元：広恵済急方下巻，東都書肆, 88～96, 1790.
2) 石井兵作：民間救急療法，柳正堂，1928.
3) 鈴木貞海：口訳本草綱目15巻．春陽堂，1929～1934.
4) 富士川游：民間葉，日本内科全書．巻2別録，吐鳳堂書店（東京），166～179，1914.
5) 足立　訒：薬草と民間療法．春陽堂，1～7，1930.
6) 大塚敬節：漢方と民間薬百科，主婦の友社（東京），1930.
7) 斉藤菊寿他1名：薬草漢薬民間療法，三省堂（東京），11～15，1930.
8) 野村瑞城：民間療法と民間薬，人文書院，327～330，1927.
9) 小林富次郎：よはい草，小林商店広告部1～5輯，145～152，1930.
10) 田所良吉：自療と民間薬．誠文堂，113～114，154～155，285，1928.
11) 酒井則夫：不思議によく効く薬草薬木療法．紀文書院（東京），1948.
12) 伊澤凡人：薬草と家庭療法．広川書店（東京），1949.
13) 佐藤潤平：家庭で使える薬になる植物．創元社（東京），1961.
14) 花田　歌：薬草入門．実業之日本社（東京），1962.
15) 山下　弘：漢方薬全草．金園社（東京），1967.
16) 太田卯藤治：医薬治療秘法全集．広友社出版部（東京），1968. 6. 28.
17) 長塩容伸他1名：民間薬療法と薬草の知識．東都書房（東京），1958.
18) 西山英雄：漢方薬と民間薬．創元社（大阪），1963.
19) 高瀬豊吉：薬草の由来伝説と薬効．加島書店（東京），1965.
20) 萩庭大寿：医薬資源．共立出版（東京），1965.
21) 慶松一郎：家庭のくすり．時事通信社（東京），1950.
22) 栗原広三：民間療法事典，東都書房版，1958.
23) 勘使河原真斉：薬草の処方と調剤，東京啓松堂版，1931.
24) 村越三千男：薬用植物事典．福村書店（東京），1962.
25) 刈米達夫：和漢薬用植物，広川出版社（東京），1963.
26) 赤松金芳：和漢薬．医歯薬出版（東京），1969.
27) 刈米達夫：薬用植物大事典．広川出版社, 1963.
28) 刈米達夫：生薬学．広川出版社，1957. 4. 5.
29) 木村康一他1名：薬用植物学総論．広川出版社，1958. 3. 10.
30) 木村康一他1名：薬用植物各論．広川出版社，1958. 4. 5.
31) 木村康一：日本の薬用植物．Ⅵ，Ⅶ，広川出版社，1957. 10. 25.